

ロドリゲス『日本大文典』所引『発心集』の検討

Study of “Hossinjū” from the “Arte da Lingoa de Iapam” by Joao Rodriguez

神 田 邦 彦

ロドリゲス『日本大文典』所引『発心集』の検討

神田 邦彦

はじめに

鴨長明の仏教説話集『発心集』の諸本は、次に示すように、八巻一〇二話からなる流布本と、五巻六二話からなる異本、及びその他の、三種に大別される。

流布本系統（八巻、一〇二話）

- ・慶安四年版本（一六五一年刊、片仮名交り本）
- ・寛文十年版本（一六七〇年刊、平仮名絵入り本）

異本系統（五巻、六二話）

- ・山鹿文庫本（江戸初期、山鹿素行写。片仮名交り本）
- ・神宮文庫本（江戸初期写か。片仮名交り本）

その他

- ・古写断簡（いずれも中世の写し。平仮名書き）
 - 兼築信行氏蔵断簡（巻三第四話の一部か）
 - 某氏蔵断簡（巻六第十二話の一部か）
 - 京都国立博物館蔵断簡（巻二第一話の一部か）

・ロドリゲス『日本大文典』（長崎学林、一六〇四～〇八年刊）所引本文
流布本には慶安四年版本と寛文十年版本とがあり、異本は山鹿文庫本と神宮文庫本という二つの写本からなる。その他は古写断簡とジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』所引本文である（正式書名は訳して『日本文典』だが、いまは通行の『日本大文典』に従う）。

流布本と異本との間には、収録説話、説話配列に大きな相違があり、かつ本文の語句にも大小の異同がある。だから、両者の関係や諸本の成立をどう考え、長明の原撰本のかたちかどのようなものであったかが問われている（詳細は次節）。

その他の、古写断簡と『大文典』所引本文については、前者は断簡ゆえ、『発心集』のそれである確証はないが、現存諸本とほぼ同文であり、『発心集』の可

能性が高いともいわれる。『発心集』の断簡であれば、中世の写本が現存しない『発心集』にあつては、中世に流布していた伝本の状態をうかがわせるものとして期待される。後者『大文典』は典拠を「Foxxinjü」などと記しているの、たしかに『発心集』によつたものと考えられ（なお、これにより、『発心集』の「集」は濁つて発音されていたことがわかる⁽¹⁾）、これは刊行が1604～08年頃のことというから、その本文は中世の写本によつた可能性が高く、これも現存伝本より古い状態を示している可能性がある。

ただし、従来は翻刻のある慶安版本と神宮文庫本にばかり注目が集まり、翻刻がない、あるいは閲覧がむずかしい等の理由からであろうか、一二の例外を除いて、寛文版本と山鹿文庫本はほとんど研究に活用されてこなかった。とくに山鹿本については、長く山鹿家の所蔵であり、近年国文学研究資料館に寄贈されたところであつて、これの影印・翻刻も最近出たばかりである（拙著『山鹿文庫本発心集——影印と翻刻 付 解題——』⁽²⁾）。また、古写断簡はいずれも近年の発見であり、兼築氏蔵断簡を除いては、ほとんど検討されていない⁽³⁾。『大文典』所引本文については、比較的古くから知られてはいたものの、二三氏を除いてはほとんど顧みられてこなかった（第二節に詳述）。だから、これらすべての現存伝本を比較・検討してみると、どのような結果が得られるかは、興味・関心のわくところであるし、そういう比較・検討は必要であろう。

そこで、筆者は、上記の伝本すべての異同が一目瞭然となり、本文の比較・検討が容易になる、対照本文形式の校本の公刊を共同で予定している。本稿は、そのための地ならしの一つで、『大文典』所引本文を、現存諸本と比較・検討し、所引本文の性格やその資料的価値について考えてみようとするものである。

1. 『発心集』の諸本

所引本文の検討に入る前に、『発心集』諸本の基礎知識を押さえておく必要があるから、以下に略述しておく。

(1) 流布本と異本の違い

その違いは、収録説話、説話配列、本文異同の三つに大別される。

収録説話は、流布本の巻一～六の全七五話のうち六〇話（異本の説話の区切り方では五八話）は異本と共通するが、流布本の巻七・八の二七話は異本に見えない。また、流布本の巻四から巻六までの説話の中にも、流布本独自話が一五話あり、異本にも異本独自話が四話ある。

説話配列は、巻一の第一話から第十一話までは、流布本と異本に違いはないが、それ以降はまったく異なっている。

本文の語句の異同は、大小さまざまなものがあるが、とくに異本は説話末尾に「南無阿弥陀仏」や「可有十念」（十念あるべし）などの文句を持つものがあって、説教の台本として使用された形跡があるとされる⁽⁴⁾。また文中の表現にも、流布本に比べて仏教的色彩の濃い表現が用いられている箇所が目立つといわれる⁽⁵⁾。

（２）流布本と異本の関係

両者の関係についてはさまざまな見方があるが、細かい問題を除けば、流布本八巻のうち、前六巻が概ね長明の原撰本であり、後ろ二巻（巻七・八）が後人の増補であって、異本は長明原撰本（流布本の前六巻）を後人が再編したものとする見方⁽⁶⁾と、流布本は八巻すべてが長明の作であるが、前六巻がまず成立し、その後、後ろ二巻（巻七・八）が長明自身の手によって増補されたとする見方（異本は前者に同じ⁽⁷⁾）とに大別できる。つまり、巻七・八が後人の増補なのか否かが主な争点となっている（前者は巻七・八に、長明より後の時代の語や思想が見られるとし、後者はそのような思想は長明の時代からあったとするが、後者に長明より後の時代の語についての言及はない）。ただ、いずれの立場にも共通しているのは、まず前六巻が成立し、のちに後ろ二巻が成立したということ、異本は流布本の前六巻（概ね長明の原撰本）を後人が再編したものということである。つまり、流布本と異本は、その源流を辿れば、同一の祖本から出ているというわけである。なお、説話配列については、いずれの立場も、概ね流布本のもものが原態であったと考えられており、異本の配列は乱れたものとする意見と、後人が再編したものとの見方がある⁽⁸⁾。

（３）本文校訂の方法

こうしたわけであるから、本文を校訂する際には、流布本の前六巻が、概ね長

明の著作ということと一致しているので、流布本の中では比較的古態を留めるとされる慶安四年版本を底本とし、そこへ異本（従来は神宮文庫本）を校合するのが通例となっている。異本を校合するのは、異本によって流布本の誤りや脱落と見られる箇所を補うことができるなど、異本の本文にも古態を留められると思われる箇所があるからである。⁽⁹⁾

なお、流布本系の寛文版本は、刊行の際に、各冊の丁数を揃え、最終丁になるべく余白が出ないように、一卷あたりの収録説話数を調整してあると考えられている。その結果、巻六末尾の跋文が巻七の巻頭に来ているなど、巻の構成に問題を生じており、慶安版本より後人の手が加わったかたちと見られている。⁽¹⁰⁾

2. 『大文典』所引本文に関する先行研究

『大文典』所引本文については、永積安明氏が先鞭を付けられ、所引本文には神宮文庫本独自話（永積氏の時代にはまだ山鹿文庫本が発見されておらず、異本といえば神宮文庫本のことであった）がなく、流布本の巻七・八所収の説話が引かれていることから、口氏の参照した『発心集』は流布本に近いものであること、流布本で巻五・六にあたる説話が「Lib.3（巻三）」と記されていることから、口氏参照の本は二巻を一冊に合綴した四冊本であり、第一冊を巻一、第二冊を巻二……と数えたものであろうとされた。⁽¹¹⁾

築瀬一雄氏は、この永積説に従いつつも、巻次の問題については、永積氏のよ様に二巻を一冊に合綴したのではなく、八巻に分割される前の四巻四冊本という形態の本の存在を想定された⁽¹²⁾（これは築瀬氏が、『発心集』諸本の成立論において、流布本の前六巻は、もとは三巻仕立てであったと見ておられることによる⁽¹³⁾ものであろう）。

つまり、『大文典』所引『発心集』は、収録説話の観点から、流布本系統に近い本文をもつものと考えられてきたが、その本文自体はさして注目されてこなかった。むしろ、それよりも、巻の構成が流布本とは異なると見られることが問題視され、それは流布本を二巻ずつ一冊に合綴したことによるもの（つまり八巻四冊本）なのか、四巻四冊という現在とは異なる形態を有していたことをうかが

わせるものなのかという、『発心集』諸本の成立を考えるにあたって、いくらかの検討材料になるのではないかという点を取り沙汰されてきたのであった。

ところが、近年、土屋有里子氏が、永積・築瀬両氏の紹介・類聚された所引本文の遺漏を補い、所引本文と慶安版本、神宮文庫本の三本を比較され（ただし、慶安版本は新潮日本古典集成本の校訂本文を使用）、本文異同の点からも所引本文は流布本に近いという結論を出された⁽¹⁴⁾。

ただし、最近、影印・翻刻が出た山鹿文庫本や、もう一つの流布本である寛文版本も加えて、語句を一つ一つ比較対照させてみると、所引本文についていえるのは流布本系統に近いということだけではない。所引本文には、卷七所収話や卷六所収の流布本独自話が見えることから、内容・構成の点では現存の流布本に近いものであったことは推測できるが、本文の語句の異同については、異本系統に一致する箇所も多数あって、その点については流布本と異本双方の性格を持っているといえるのである。したがって、それは、所引本文が流布本と異本の校合本であったことを示すのか。あるいはまた、流布本と異本が同一の祖本から出たとする従来の見方を裏付け、流布本と異本とに分化する前の状態を一部にとどめるからなのか、ということになる。そこで思い合わされるのは、『発心集』からの直接引用が認められる『私聚百因縁集』（住信編の仏教説話集。正嘉元年〈1257〉成立）の本文や、前述の兼築氏蔵古写断簡の本文が、流布本・異本双方の性格を持っていると指摘されていること⁽¹⁵⁾である。つまり、所引本文にしても、『私聚百因縁集』の引用本文にしても、古写断簡にしても、『発心集』の中世の写本と思しい本文は、共通して流布本・異本双方の性格を有するらしいということなのである。そうしてみると、中世に流布していた『発心集』の本文というものは、そういう性格のものであった可能性が高いし、従来いわれているように、流布本と異本とは同一の祖本から出たと考えられることになるのである。また、この所引本文は、『発心集』の本文校訂に際しても、従来の誤りが是正できると思われる箇所もあり、その点でも所引本文は参考になるところがあると考えられるのである。

そこで次節からは山鹿本や寛文版本、『発心集』からの直接引用が認められる

『私聚百因縁集』も検討材料に加え、所引本文と現存諸本との比較検討を行って、所引本文の性格や資料的位置付けについて考えてみたい。

3. 所引本文と現存諸本の比較検討

所引本文と現存諸本の比較検討は、以下の方針で行う。

- ア. 『大文典』所引本文を、『大文典』の巻頭から巻末に向かって、順を追って抜き出し、それを現存の『発心集』四伝本（流布本系統は慶安四年版本・寛文十年版本。異本系統は山鹿文庫本・神宮文庫本）と比較検討する。また、『発心集』からの直接引用と見られる『私聚百因縁集』の同話がある場合にはこれも加える。なお、『大文典』には、出典を「発心集」としながら、『発心集』中には見出せず、『方丈記』にあるものや、出典を「撰集抄」としながら、『撰集抄』に見当たらず、『発心集』にあるものも若干ある。いずれも出典名を誤ったり、出典を取り違えたりしたものと考えられるが、これらも校勘のために、ここに加えた。
- イ. 『大文典』の原文は『日本文典 ADTE DA LINGOA DE IAPAM』（ロドリゲス著、土井忠生解題、三橋健書誌解説、勉誠社、1976年2月）の影印によって掲出した。また、訳文は『日本大文典』（J. ロドリゲス原著、土井忠生訳注、三省堂、1955年3月初版、1974年3月5刷）の訳文に倣ったが、同書の訳文は適宜漢字を充てており、それでは比較対照するのに不便であるから、すべて平仮名書きに改めた。なお、訳文の末尾に、影印の頁数と行数、訳文の頁数を付記した。たとえば、「影93頁下⑩／訳164頁」は、影印本の93頁、下から17行目、訳本の164頁にあることを示す。
- ウ. 対照させた『発心集』の四伝本と『私聚百因縁集』はそれぞれ以下の所蔵本に拠った。

慶安四年版本 国文学研究資料館所蔵本（8巻4冊、タ4-48-1～4）

寛文十年版本 同上（8巻8冊、96-298-1～8）

山鹿文庫本 国文学研究資料館所蔵山鹿積徳堂文庫本（5巻2冊、A223）

神宮文庫本 神宮文庫所蔵本（5巻5冊、2-1671）

私聚百因縁集 吉田幸一氏蔵承応二年（1653）刊本（吉田幸一編『私聚百因縁集 下』、古典文庫第272冊、1970年2月の影印による）

エ. 本文の比較検討にあたっては、異同がわかりやすいよう、異同のある箇所についてはゴシック体とし、また所引本文の訳文には、流布本系統とのみ共通する箇所に一重の傍線——を、異本系統とのみ共通する箇所には二重傍線＝＝を、『大文典』所引本文独自の異同箇所には波線~~~~を付した。

オ. 『発心集』各伝本、及び『私聚百因縁集』の翻刻にあたっては、ルビも原本通り翻刻した。ただし、慶安版本のルビについては、ほとんど総ルビであることから、おそらく多くは刊行時に付されたものであって、すべてがもともとから付いていたものとは思われない。また、これには誤りも多い。

カ. 本稿では、所引本文の原文がローマ字表記であることから、全体を横書きとしたが、そのため、二字以上の繰り返しを示す踊り字が「/ \」のように印字されることを、あらかじめご了承ください。

1. Nagacarō Miyderani Chicōnaicōtote tattoqi fito ari : toxi tacaqu natte nochī, &c. Foxxijū Lib. 3.

(訳文) ながからう みるでらに ちかう ないこうとて たつとき ひと あり、
とし たかく なつて のち、云々。ほつしんじふ 卷3。【影20頁下③／訳18頁】

卷6-1 「証空替師命事」（寛文版本は5-13。異本は3-1）

訳 ながからう みるでらに ちかう ないこうと てたつとき ひと あり
 慶 ^{ナカ}中 ^{コロ}采 三井寺 二智^{チケウ}興^{ナイ} 肉^ク 供 ト云 テタウトキ人 有 ケリ
 寛 中 比 三井寺 二智^{チケウ}興^{ナイ} 肉^ク 供 といひてたうとき人 ありけり
 山 中 比 三井寺 二智^{チケウ}興^{ナイ} 肉^ク 供 ト云フ 尊 キ人 有 ケリ
 神 中 比 三井寺 二智^{チケウ}興^{ナイ} 肉^ク 供 ト云フ 尊 キ人 有 ケリ

訳 としたかくなつてのち云々。ほつしんじふ卷3。

慶 年 タカク成 テ

寛 としたかくなりて

山 年 ^{タケテ} 闌
 神 年 ^{タケテ} 闌

* 「たかくなつて」部分が流布本と一致。「ちこう」部分は、流布本「智興」、異本「智空」。「空」は空也（くうや・こうや）のように、「コウ」とも読む（「コウ」は漢音）から、「興」（コウ）と「空」（コウ）の音通はありうる。ここはどちらに近いか明らかでない。なお、慶安版本や寛文版本の振り仮名のように、「興」を「キョウ」と読めばその限りではないが、僧名としては「コウ」であろう。なお、巻次について、所引本文は巻三だとしている。現存の流布本では巻六であるから、たしかに従来言われているように、六冊を三冊に合綴したのを、巻一、二、三と数えたか、それとも六巻仕立てになる前の三巻仕立てであったころのものか、ということになる。ただし、現存の異本でも巻三であるから、これだけでは判断できない。後掲15参照。なお、波線部「ながからう」は文意不通で、誤写によって生じたものか。

2. Auare Guenjino suyezuyeyuo taneuo tatte forobubexi. Foxxinju.

（訳文）あはれ げんじの すゑずゑの たねを たつて ほろぶべし。ほつしんじふ。〔影43下⑧／訳66〕 * 後掲21に重出。現存『発心集』にない。舞の本「未来記」の「溢れ源氏の末々は、胤を断つて滅ぼすべし」（新大系308頁）か。

3. Negauacuua naguequi tamócoto nacare. Ibidem.

（訳文）ねがはくは なげき たまふこと なかれ。同前。〔影43頁下⑧／訳66頁〕

* 後掲22に重出。なお、「Ibidem」とは同前・同書の意。

巻6－1 「証空替師命事」（寛文版本は巻5－13。異本3－1）

訳 ねがはくはなげきたまふことなかれ

慶 ^{ネカハ}願 クハ^{ナケキ}歎 給 フ事 ナカレ

寛 ねがはくはなげき給 ふ事 なかれ

山 願 ハ歎 キ給 フコト无 レ（「コト」原本は合字）

神 願 ハ歎 キ給 事 无 レ

*ここに異同はない。

4. Icagaua xen iyoyoni caraiuo quitçu, naqu naqunan vacareni queri. Foxxinju. 3.

(訳文) いかがは せん いよいよに からひお きつ、なく なくなん わ
かれに けり。ほつしんじふ 卷3。〔影91頁下⑦/訳160頁〕*後掲12に一部重出。

卷5-1 「唐房法橋発心事」(寛文版本は卷4-10。異本4-14)

訳 いかがはせん いよいよにか らひおきつ なくなく なん わかれにけり

慶 イカ、ハセム サマ / \ ニカタラヒ置 ^{ヲキ} ツ、ナク / \ ワカレニケリ

寛 いか、はせん さま / \ にかたらひをきつ、なく / \ わかれにけり

山 如何 ハセント様 ヲ ニカタラヒヲキテ 鳴 ヲ ナン 別 ニケリ

神 如何 ハセント様 ヲ ニカタラヒヲキテ 鳴 ヲ ナン 別 ニケリ

*「いかがはせん」は、異本のように直後に「ト」がないから、その点は流布本に一致するが、「なくなくなんわかれにけり」の「なん」は異本に一致し、流布本・異本両方の特徴を有する箇所である。ただし、現存諸本で「さま / \」とするところを「いよいよ」とするのは、所引本文独自であるが、文脈から見てこれは誤りか。また、所引本文や流布本に、異本にある「ト」がないのは、単純な誤脱か、それとも異本の意改か、両様考え得る。流布本にのみ「なん(なむ)」がないのは、これらが江戸期に刊行された本であることを考慮すると、「けり」で結んでいることから不要と考え、削除するという校訂が加わったものとも考えられる。

5. Cano musumeua vosore todomari queredomo, nauo atouo tadzunete yuquite amani naritçtçu. Foxxinju.

(訳文) かの むすめは おそれ とどまり けれども、なを あとを たづ
ねて ゆきて あまに なりつつ。ほつしんじふ。〔影91頁下③/訳160頁〕

卷1-6 「高野南筑紫上人出家登山事」(寛文版本も異本も同じ)

訳 かのむすめは おそれ とどまり けれども なをあとをたづねて

慶 ^{カノ} 彼 ^{ムスメ} ムスメ ^{ヲソレ} 恐 テト、マリ タリケレド ^{ナヲ} 猶 ^{アト} 跡 ^{ツツネ} ヲ尋 テ

寛	かのむすめ	おそれてとゝ	まりたりけれと	なをあとをたつねて
山	彼女 ^メ	恐レテト	マリタリケレド	猶ヲ跡 ヲ尋 テ
神	彼女 ^メ	恐レテト	マリタリケレド	猶ヲ跡 ヲ尋 テ
私	彼女 ^メ	恐 ^レ	留 ^{ト、マル}	尚 ^ヲ 尋 ^ネ 跡 ^{アトヲ}

訳 ゆきて あまになりつつ
 慶 ^{アマ} 尼 ニナリテ
 寛 あまになりて
 山 京二来リテ尼 ニ成リツ、
 神 京二来リテ尼 ニ成リツ、
 私 来 テ成^リ ^{アマニ} 尼 ツ、

*ここは『私聚百因縁集』巻九第十七話と同話である。「かのむすめは」「けれども」など、所引本文独自の異同もあるが、「とどまり」は流布本に一致、「あまになりつつ」は異本や『私聚百因縁集』と一致する。また、異本で「京二来リテ」、『百因縁集』で「来テ」とある部分は、流布本にはまったくなく、所引本文は「ゆきて」となっており、異本や『百因縁集』とは同文ではないが、内容的に近いものがある。『百因縁集』が『発心集』から直接引用したものであることを踏まえると、ここは流布本の脱落とも推測できる。いずれにせよ、ここも流布本・異本両様の特徴を有する。なお、異本の「トマリ」は、「ト、マリ」から繰り返し記号「、」の単純な脱落である可能性がある。

6. Cacuxi tatematçuranto vomoixi monouoto namidaou vosayetçutçu catareri. Foxxinju.

(訳文) かくし たてまつらんと おもひし ものをと なみだを おさえつつ
 かつたれり。ほつしんじふ。〔影92頁上⑥／訳161頁〕*後掲8も同じ。

巻5-1「唐房法橋発心事」(寛文版本は巻4-10。異本4-14)

訳 かくしたてまつらんと おもひしものを と なみだを おさえつつ

慶 カクレ奉 ラント^{ツカマツ}仕 ルナリト^{ナミタ}涙 ヲオサヘツ、
 寛 かくれたてまつらんとつかまつるなりとなみたをおさへつ、
 山 隠 レ奉 ラントシ給フモ道理也ト涙 ヲ押 ヘツ、
 神 隠 レ奉 ラントシ給フモ道理也ト涙 ヲ押 ヘツ、

訳 かたれり

慶 ^{カタル}語 ヲキクニ

寛 かたるをきくに

山 語 ルヲ聞クニ

神 語 ルヲ聞 ニ

* 「おもひしものを」、「かたれり」、どちらも所引本文独自である。

7. Yamano bōniua acarasama nite ide tamai nuruni, fisaxiqu narinuru coso ayaxiqu nado iyedo, cacutoua icadeca vomoiyoran ?

(訳文) やまの ぼうには あからさま にて いで たまひ ぬるに、ひさしく なりぬる こそ あやしく など いへど、かくとは いかでか おもひやらん。〔影92頁上⑩/訳161頁〕*典拠名なし。

卷1-3 「平等供奉離山趣与州事」(寛文版本も異本も同じ)

訳 やまのぼうにはあからさまにて いでたまひぬるに ひさしく

慶 ^{ヤマ}山 ^{ハウ}ノ坊 ニハアカラサマニテ 出 給 ヌル ^{ノチ}後 久 ^{ヒサシク}

寛 山 の坊 にはあからさまにて 出 給 ぬるのちひさしう

山 山 ノ坊 ニハ^{アカラサマニ}白^ニ地 立チ出 給 ヒシ ニ 程

神 山 ノ坊 ニハ^{アカラサマニ}白^ニ地 ニ 立チ出 給 ヒシ ニ 程

訳 なりぬるこそあやしくな ど いへど かくとはいかでか おもひやらん

慶 ^{ナリ}成 ヌル コソ アヤシ フナムト イヘド カクト ^{イカテ}ハ争 カヲモヒヨラン

寛 なりぬるこそあやしうなむと いへと かくとはいかでか 思 ひやらん

山 経ヌレハ 恠 シ トハ思 ヘトモ 争 カ思 ヒ依ラン

神 經又レハ 恠 シ トハ思ヘトモ 争 カ思 ヒ依ラン

*ここは、傍線部のように、全体的に流布本と一致する箇所が多い。

8. Cacuxi tatematçurâto vomoixi monouoto namidauro vosayetçutçu catareri.
Foxxinju.

(訳文) かくし たてまつらんと おもひし ものをと なみだを おさえつ
つ かたれり。ほつしんじふ。〔影92頁下⑮／訳162頁〕→前掲6を見よ。

9. Miuagauano quiyoqui nagareni susuguitexi Coromono sodeuo mataua que-
gas xi. Foxxiju.

(訳文) みわがはの きよき ながれに すすぎしてし ころもの そでを
または けが(さ)じ。ほつしんじふ。〔影92頁下⑯／訳162頁〕*後掲34、38も同じ。

巻1-1 「玄賓僧都遁世逐電事」 (寛文版本も異本も同じ)

訳 みわがはのきよきながれにすすぎてしころものそでをまたはけがさじ
慶 ^ミ三輪川 ^{ワカハ}ノキヨキ流 ^{ナカ}レニス、キテシ衣 ^{コロモ}ノ袖 ^{ソデ}ヲ又 ハケカサシ
寛 三輪川 のきよきなかれにすゝきてしころもの袖 を又 はけかさし
山 三輪川 清 キ流 レニス、キテシ衣 ノ袖 ヲ又 ハ汚 サシ
神 三輪川 ノ清 キ流 レニス、キテシ衣 ノ袖 ヲ又 ハ汚 サシ

*原文の「quegas xi」の部分の空格は影印が不鮮明で判読できず。文意から
「a」か。これは玄賓の和歌であるが、ここに異同は見当たらない。

10. Idzucuyeca yuqu miyotote, fitouo tçuquete yaritengueri.

(訳文) いづくえか ゆく みよとて、ひとを つけて やりてんげり。〔影92
頁下⑰～93頁上⑱／訳163頁〕*典拠名なし。

巻5-1 「唐房法橋発心事」 (寛文版本は巻4-10。異本4-14)

訳 いづくえかゆくみよとてひとをつけてやりてんげり
慶 イヅクヘ 行 ゾミヨトテ人 ヲツケ ヤリテ ゲリ
寛 いつくへ ゆくそ見よとて人 をつけ やりて けり

山 何 へカ行ク 見ヨトテ人 ヲ付 テヤリ ケル

神 何 へカ行ク 見ヨトテ人 ヲ付 テヤリ ケル

* 「いづくえかゆく」と「ひとをつけて」の部分は異本と一致し、「てんげり」は流布本と一致（流布本の「てけり」は当然「てんげり」と読むものであろう）し、流布本・異本両様の特徴を有する。いずれも一字の有無であるから、書写時の脱落の可能性もあるが、所引本文が流布本と異本とを校合したという可能性もあるといえる。

11. Cono votocoua iyeno mayeni gojicchō bacarinan motare queru. Xenjuxo.

（訳文）この をとこは いえの まえに ごじつちやう ばかりになん も たれ ける。せんじふせう。〔影93頁下⑩／訳164頁〕* 典拠は『撰集抄』（Xenjuxo）とあるが、『発心集』の誤りか。

巻1-6 「高野南筑紫上人出家登山事」（寛文版本も異本も同じ）

訳 このをとこは いえの まえにごじつちやうばかり になんも たれける

慶 此 男 ^{コノヲトコ} ハ家 ^{マヘ}ノ前 二五十 町 バカリ ナム持 タリケル

寛 此 おとこは 家 のまへに五十 町 はかり なむもちたりける

山 此ノ男 ハ我 カ前へ二五十 丁 計 リ ナン持 タチケル

神 此 男 ハ我 前へ二五十 丁 計 ナン持 タチケル

私 此 男 ^{コノヲトコ} ハ家 ^{マヘ}ノ前 五十 町 計 ^{ハカリナン} ^{モチ} タリケレハ

* 「いえの」部分は流布本や『私聚百因縁集』（巻九第十七話）に一致する。「ばかりに」「もたれける」は所引本文独自の異同。

12. Naqunaqunan varaini queru. Foxxiju.

（訳文）なくなくなん わらひに ける。ほつしんじふ。〔影94頁上⑩／訳166頁〕

* 前掲4の一部に同じ。ただし、「わらひに」は「わかれに」の誤りか。

13. Cacaru cocorouqui vazauonan mi famberiqui. Ibidem.

（訳文）かかる ころうき わざをなん みはんべりき。同前。〔影94頁下⑩／

訳166頁〕＊「Ibidem」(同前)とあり、前掲12の「Foxxiju」を承けるが、『方丈記』養和の飢饉の条の「濁悪世にしも生れあひて、かかる心うきわざをなん見侍りし」(本文は角川ソフィア文庫28頁①による)の一部であろう。

14. Vare Fotoqueni ai tatematçurixicaba, icanaru norini tçuqueteca susume tamauamaxi. Foxxiju.

(訳文) われ^レほとけに あひ たてまつり^リしかば いかなる のりに つけてか すすめ たまはまし。ほつしんじふ。〔影95頁上⑦/訳168頁〕

発心集序

訳 われ^レほとけにあひたてまつり^リしかばいかなるのりにつけてか
 慶 ^{ワレ}我 ^ラ等^{ホトケ}仏 ^ニ値 ^{アヒ}奉 ^{タマツ} ラマシカバ^{イカ}何 ^{ナル}法 ^ニ付 ^{ツイ}テカ
 寛 われらほとけにあひたてまつらましかはいかなる法につけてか
 山 我 ^ラ等^ニ仏 ^ニ遇 ^ラ奉 ^{マシカハ}如何^{ナル} 法 ^ニツケテカ
 神 我 ^ニ等^ニ仏 ^(マ)過 ^ラ奉 ^{マシカハ}如何ナル法 ^ニツケテカ

訳 すすめ^スたまはまし^メ

慶 勸^ス ^{タマ}給 ^ハマシ

寛 すゝめ^ス給^ハはまし

山 勸^ス ^ハ給

神 勸^ス ^メ給 ^ン

＊「たまはまし」部分は流布本に一致する。なお、所引本文の「のり」は「法」を「のり」と読んだものであろう。波線部「われ^レ」「あひたてまつり^リ」「しかば」は、誤脱・誤写が生じた結果であろうか。

15. Ichinichi futçucano tayemauodani, varinaqu voboyuruni tachi vacareteua tayubequemo arazariqueredomo, icagaxento iyoiyoni catarai voquitçu. Foxxiju. Lib. 3.

(訳文) いちにち ふつかの たえまをだに、わりなく おぼゆるに たち

わかれては たゆべくも あらざりけれども、いかがせんといよいよに かつらひ おきつ。ほつしんじふ、巻3。〔影187頁下①～188頁上①／訳343頁〕

*後半「いかがせん」と以下は前掲4に同じであるから省略。

巻5-1 「唐房法橋発心事」(寛文版本は巻4-10。異本4-14)

訳 いちにちふつかのたえまをだにわりなくおほゆるに

慶 一 日 ノタエマ ダニワリナク^{ヲホユ}覚 ルヲ

寛 一 日 二 日 のたえま だにわりなくおほゆるを

山 二 三 日ノ絶 間 スラワリ无ク覚 ルニ

神 二 三 日ノ絶 間 スラワリ无ク覚 ルニ

訳 たちわかれてはたゆ べくもあらざりけれども

慶 立 別 ^チテハ^{ワレ}タヘヌバクモアラネ ド

寛 たちわかれてはたへぬへくもあらね と

山 立 別 テハ行 へ モアラネ ト

神 立 別 テハ行 へ モアラネ ト

*「いちにちふつか」部分は寛文版本に一致する。慶安版本は「ふつか」に相当する語句が脱落したもののか。『方丈記・発心集』(新潮日本古典集成)や『新版発心集』(角川ソフィア文庫)は慶安版本のまま「一日の絶え間だに」とするが、ここは寛文版本と所引本文とによって、「一日二日の絶え間(を)だに」と校訂するのが妥当との見方もできる。「だに」は流布本に一致。「おほゆるに」は異本に一致。「たゆべく」部分は流布本に近い。「あらざりけれども」は所引本文独自の異同。流布本・異本両様の特徴をもち、かつ所引本文独自の異同もある。また、所引本文によって、慶安版本に脱落と考えることができる箇所も指摘できるところである。

なお、ここは巻次が巻三と記されているところであり、現存の流布本(慶安版本)では巻五にあたる(寛文版本の巻次は後人の改変によるもの。前述)ところであるから、従来言われているように、六巻を二巻ずつ一冊に合綴した時に、第一冊を巻一、第二冊を巻二と呼んだか、六巻に分巻される前の三巻仕立

てであった時の形態を残すかのいずれかだろうか。なお、異本は巻四であるから、異本の巻次とは一致しない。

16. Icadeca ima fitotabi arixi sugatauo min nando, negôte acaxi curasu.
Foxxinju Lib. 3.

(訳文) いかでか いま ひとたび ありし すがたを みんなど、ねがうて あかし くらす。ほつしんじふ 巻3。〔影188頁上⑦／訳344頁〕

巻5-4 「亡妻現身归来夫家事」(寛文版本は巻5-1。異本2-10)

訳	いかで	か	いま	_____	ひとたび	ありし	~~~~~	すがたを	_____	みんな	んど					
慶	イカデ	今	_____	一	度	アリシ	ナガラ	ノ	姿	ヲ	見	ト				
寛	いかで	今	_____	一	度	ありし	なから	の	すか	たを	_____	みん	と			
山	争	カ	今	_____	一	度	有	シ	時	ノ	姿	ヲ	モ	見	ン	ト
神	争	カ	今	_____	一	度	有	シ	時	ノ	姿	ヲ	モ	見	ン	ト

訳	ねがうて	~~~~~	あかし	くらす					
慶	涙	ニムセビツ	、	明	シ	暮	ス		
寛	な	みたに	むせ	ひつ	、	あかし	くらす		
山	涙	ニ	咽	ヒ	テ	明	シ	暮	ス
神	涙	ニ	咽	ヒ	テ	明	シ	暮	ス

* 「いかでか」は異本に一致するが、ここなどは「か」を書き落したか、あるいは後人が書き足したかによって生じた異同と想像できる。「いまひとたび」「すがたをみんな」などは流布本に一致。「ありし` ` ` `すがた」や「みんなんど」「ねがうて」などは所引本文独自の異同。これらも、脱落・意改など、書写時に生じた異同と見ることが出来る異同であろう（「ねがうて」は、たとえば「涙ニムセビツ、」が脱落して文意が通りにくくなったのを、前後の文脈から「ねがうて」と補入したかとも考えられる）。こうして比較してみると、流布本にも、異本にも、所引本文にも、相当誤写・脱落、意改等のあることが想像される。

17. Vataximoricoso gueni tçumi naqute youu vataru michi nariquemetote.

Saiguiö.

(訳文) わたしもりこそ げに つみ なくて よを わたる みち なりけ
めとて。さいぎやう。〔影241頁上⑤／訳428頁〕 * 典拠名は『西行』(Saiguiö) とす
るが、『発心集』の誤りか。

卷1-1 「玄賓僧都遁世逐電事」(寛文版本も異本も同じ)

訳 わたしもりこそげにつみなくてよをわたるみちなりけめとて

慶 渡 守 コソゲニ罪 ナクテ世ヲ渡 ル道 ナリケルトテ

寛 わたしもりこそげにつみなくて世をわたる道 なりけれとて

山 渡 シ守リコソゲニ罪 无クテ世ヲ渡 ル道チナリケレトテ

神 渡 シ守 コソゲニ罪 无クテ世ヲ渡 ル道 ナリケレトテ

* 「けめ」部分は所引本文のみが「けめ」とする。寛文版本、山鹿文庫本、神
宮文庫本は「けれ(ケレ)」、慶安版本は「ケル」とする。

18. Moxi catachiuo yatçuxi, cocorouo sumete, yono chirini quegasarezaru fito
sura, nono caxegui tçunagui gataqu, iyeno inu tçuneneni nareri, nanzo iuanya
inguano riuo xirazu, miörino ayamarini xidzumeruuoya? Foxxinju.

(訳文) もし かたちを やつし、こころを すめて、よの ちりに けがさ
れざる ひと すら、のの かせぎ つなぎ がたく、いえの いぬ つねに
なれり、なんぞ いわんや いんがの りを しらず、みやうりの あやまり
に しずめるをや。ほつしんじふ。〔影245頁上③／訳435頁〕 * 後掲19に一部重出。

発心集序

訳 もしかたちをやつしこころを^(マ、)すめてよのちりに

慶 若 形 ヲヤツシ衣 ヲ染 テ世ノ塵 ニ

寛 もしかたちをやつし衣 をそめて世のちりに

山 若 像チ ヲ糞 衣 ヲ染 テ世ノ塵 ニ

神 若 像 ヲ糞 衣 ヲ染 テ世ノ塵 ニ

訳 けがされざるひとすらの_____のかせぎつなぎがたくいえのいぬ____
 慶 ケガサレザル人 スラ^{ソトモ}蹄^{ツナキ} ノカセギ^{イェ}縹^{イヌ} ガタク家 ノ犬 ____
 寛 けか れざる人 すら^{カセキ}そ^{ツナキ}も^{ツナキ}のかせぎつなぎかたく家 のいぬ____
 山 汚カサレサル人 スラ^{カセキ}野^{ツナキ}ノ鹿 縹^{ツナキ} カタク家 ノ犬 二
 神 汚カサレザル人 スラ野^{カセキ}ノ鹿 縹^{ツナキ} カタク家 ノ犬 二

訳 つねになれ^{ツネ}り^{イカニ}なんぞ^{イハン}いわんやいんがのり をしらずみやうりの
 慶 常^{ツネ} ニナレ^{イカニ}タリ何^{イハン} 況^{イン} ヤ因^{クワ} 果^{コトハリ}ノ理^シ ヲ知^{ミセウ}ラス名^リ 利^リノ
 寛 つねになれたり^{ツネ}いか^{イカニ}にいはん^{イハン}や^{イン}因^{クワ} 果^{コトハリ}のことは^{ミヤウ}りをし^リらす名^リ 利^リの
 山 常^{ツネ} ニ馴^{イカニ} タリ何^{イハン} ニ況^{イン} ヤ因^{クワ} 果^{コトハリ}ノ理^シ ヲ不^{ミヤウ}知^リ名^リ 利^リノ
 神 常^{ツネ} ニ馴^{イカニ} タリ何^{イハン} ニ況^{イン} ヤ因^{クワ} 果^{コトハリ}ノ理^シ ヲ不^{ミヤウ}知^リ名^リ 利^リノ

訳 あやまりにしずめるをや

慶 繆^{アヤマリ} ニシツメル哉^{ヲヤ}

寛 あやまりにしつめるをや

山 談^{カタラヒ} ニ沈^{カタク} メルヲヤ

神 談^{カタラヒニ} 沈^{カタク} メルヲヤ

*ここは「ののかせぎ」の、はじめの「の」が問題である。慶安版本は「蹄」、
 寛文版本は「そとも」、山鹿文庫本は「野」、神宮文庫本は「野^{スラ}」と、ルビも含
 めれば四本すべて異なる。この部分の前後、「ののかせぎつなぎがたく、いえ
 のいぬつねになれり」は、『往生要集』巻中、大文第五、第四「止悪修善」の
 「野鹿難繫、家狗自馴」(野の鹿繫ぎがたく、家の狗自ら馴れたり)に拠ったも
 のと思われる箇所⁽¹⁶⁾で、ここは漢字で表記するなら山鹿文庫本のようにすべきと
 ころかと思われる。神宮文庫本の「野^{スラ}」は直前の「スラ」が「野」の字の振り
 仮名として誤って書かれてしまったことによるものだろう。また、慶安版本の
 「蹄」(偏は「里」、旁は「市」)は、異体字の字典類には見当たらないが、以下
 に示すように、慶安版本の刊行年次に近い元禄四年(1691)版の『新撰増補京
 大絵図⁽¹⁷⁾』には「北蹄天神」とある(後掲写真)から、「野」の異体字と見てよい。



しかし、新潮日本古典集成本や角川ソフィア文庫本などは、校訂本文を「𨮑」^{そとも}として、これを「そとも」と読む漢字だとしており、⁽¹⁸⁾また『大漢和辞典』補卷は「𨮑」を立項、これを国字とし、「そとも。背面。外面。山の北側。また、家の裏手」と説いて、典拠に『倭字攷』を挙げるが、⁽¹⁹⁾はたして同書里部には「𨮑」^{ソトモ}として「鴨長明ノ発心集ノ序ニ「𨮑」ノカセキ、縹カタク」とあつて、⁽²⁰⁾これは『発心集』の当該箇所⁽²⁰⁾に拠ったものであり、このことの是非を検証する材料たりえない。『倭字攷』の著者岡本保孝は、『発心集』の古注釈書『発心集攷』の著者であるから、『発心集』の注釈の際に見出したのであろう。その『発心集攷』には、はたして「𨮑ノカセキ 外面ノ鹿ナリ。𨮑ノ字別ニ云ヘシ」とあつて、⁽²¹⁾「別ニ云」うというのは『倭字攷』のことかと察せられる。つまり、この一例のみによって、『大漢和辞典』補卷がこれを「野」とは別の字として立項したのは誤りであったというほかない。

そこで残る問題は「野」を「の」と読むべきか、「そとも」と読むべきか、ということになるが、古辞書・訓点資料中に「野」を「そとも」と読む例は見いだせず（公刊されている古辞書類や『訓点語彙集成』による）、出典と思われる『往生要集』の古写本にも、そうした読みを持つものは見当たらず、所引本文も「の」としているから、「の」とした方が一応は自然であろう。ただ、

「野」一字ではなく、「野の鹿」という単位で考えた場合は、それを「そとものかせぎ」と風情のある読み方をして、「そとも」は外側の意であるから、意味するところは同じで、こうした読み方があったとしてもおかしくはないように思う。むしろ、慶安版本の「^{ソトモ}蹄ノカセギ」という読み方（寛文版本は「そとものかせぎ」）は、「野の鹿」を風情ある言い方で読んだものだったのではないか。ここは出典が漢文であるから、いろいろな読み方があってよいが、翻字する時は「野」とすべきである。

なお、異本の「^{カクラヒ}談」は「誤」の誤記・誤写から生じた異同であろう。また、所引本文の「なんぞ」は「何」を「いかに」ではなく「なんぞ」と読んだことによるもの、「すめて」は「^{ソメテ}somete」を「^{スムエテ}sumete」と誤ったものか。

19. Yono chirini quegasarezaru fitosura, &c. Foxxinju.

（訳文）よの ちりに けがされざる ひとすら、云々。ほつしんじふ。〔影246頁上②／訳437頁〕 * 前掲18の一部に同じ。

20. Toqu tocoroua tayenaredomo, vru tocoroua yequi sucunaxi. Foxxijujo.

（訳文）とく ところは たえなれども える ところは えき すくなし。ほつしんじふじよ。〔影249頁上②／訳442頁〕

発心集序

訳 とくところはたえなれどもえるところはえきすくなし

慶 ^{シヨセツ}所説 ^{タヘ}妙 ^{ウル}ナレトモ得 ^{トコロ}所 ^{ヤク}ハ益 ^{カナ}スクナキ哉

寛 所説 たへなれともうる所 は益 すくなきかな

山 ^ク説 ^ハ所 ^ハ妙へナレトモ得 ^ハ所 ^ハ益 ^{シキ}少 ^ヲヤ（「トモ」は合字）

神 説 所 ^ハ妙へナレトモ得 ^ハ所 ^ハ益 ^{シキ}少 ^ヲヤ

* 「とくところは」は異本に一致する。流布本は「所説」とし、意味するところは同じであるが、ここが後半の「えるところは」と対句になっており、またこの発心集序に対句が多用されていることを踏まえれば、異本や所引本文の方が妥当である。流布本も、「^レ説」として、「^レ説く所は」と訓読するなら、異

本と所引本文と同じになるから、訓点が落ちて「所説」となったものかもしれない。そうだとすれば、ここも異本や所引本文と対照することによって、流布本に誤写・脱落等の可能性が想定できる場所であるといえる。

異本の「益少^シキ」は、それでも文意は通るが、流布本や所引本文の方が、対句として考えた場合には通りがよい。あるいは「益少」からの誤認や誤写に基づくものか。なお、異本の「妙^へ」の「へ」は捨て仮名で、それが割書きにされていることと合わせて中世の伝本の状態をうかがわせるものといってよい。

21. Auare Guenjino suyezuyeno taneuo tatte forobosubexi. Foxxinju.

(訳文) あはれ げんじの すゑずゑの たねを たつて ほろぼすべし。ほつしんじふ。〔260頁上⑩／訳461頁〕 * 前掲2に同じ。

22. Negauacuua naguequitamō coto nacare. Idem.

(訳文) ねがはくは なげきたまふ こと なかれ。同前。〔260頁上⑪／訳462頁〕 * 前掲3に同じ。

23. Auare mutçucaxiqui yono nacacana! Foxxinju Lib. 1.

(訳文) あはれ むつかしき よの なかかな。ほつしんじふ 巻1。〔影260頁下⑬／訳462頁〕 * 典拠名に『発心集』とあるが、『撰集抄』の誤りか。『撰集抄』巻1-7「讚州白峯之事」に「あはれむつかしき世中かな」とある(岩波文庫本49頁)。

24. Macotonarucanaya cono coto. Chōmei.

(訳文) まことなるかなや この こと。ちやうめい。〔影264頁上⑱／訳468頁〕 * 典拠は『長明』とするが、『発心集』の誤りか。『大文典』では『長明』は一樣に『方丈記』を指す。『大文典』に『方丈記』という書名は見えない。『方丈記』の現存伝本にも『方丈記』という書名をもたず、仮題を付けたと思しきものの(たとえば、永青文庫本の「鴨長明外山庵記」など)があるから、ロドリゲ

スの見た『方丈記』もそうした書名のない本で、仮に「長明」と呼んだものか
もしれない。

発心集序

訳 まことなるかなやこのこと

慶 ^{マコト}実 ^{カナ}ナル哉 ^{コノ}此 ^{コト}言

寛 まことなるかな 此こと

山 此ノ事真ナル哉

神 此 事真ナル哉

*ここは流布本にほぼ一致する。異本のそれは倒置で記してあったのを、直した
ものだろうか。所引本文の「かなや」は独自の異同であるが、「哉」の一字
を「かなや」と読んだことによるものか。

25. Cono acatçuqui vxetamainutozo iyqueru. Foxxiju.

(訳文) この あかつき うせたまひぬとぞ いひける。ほつしんじふ。〔影268
頁上③／訳475頁〕

巻3-3 「伊予入道往生事」(寛文版本は巻3-2。異本2-6)

訳 このあかつき~~~~うせたまひぬとぞ___いひける

慶 此 暁 ^{コノ} ^{アカツキ} ^{クマヒ}ハヤクウセ給 ヌト ナン云 ケル

寛 此 あかつきはやくうせ給 ひぬと なんいひける

山 コノ暁 ハヤ ウセ給 ヒヌト ___云 ケリ

神 此 暁 ハヤ ウセ給 ヒヌト ___云 ケリ

*ここは、流布本と一致するところと、異本に一致するところと、両様ある。
また、所引本文独自の異同もある。

26. Yagate idzuchitomo naqu cacureni queritozo.

(訳文) やがて いづちとも なく かくれに けりとぞ。〔影268頁上④／訳475頁〕

巻1-2 「同人伊賀国郡司二被仕給事」(寛文版本も異本も同じ)

訳 やがていづちともなくかくれにけりとぞ

慶 ヤガテイツチトモナクカクレ隠 ニケリトゾ

寛 やかていつちともなくかくれにけりとそ

山 何 クトモナク隠 ニケリ

神 何 クトモナク隠 ニケリ

*ここは傍線部のように、流布本と一致するところが多い。

27. Curumani noranto xexiga, matatomo mimajizocaxito, sasugan cocorobo-soquya vomoiquen. Föxxinja.

(訳文) くるまに のらんと せしが、またとも みまじぞかしと、さすがん
こころほそくや おもひけん。ほつしんじや。〔影270頁上⑦／訳478頁〕* 典拠名
『Föxxinja』(ほつしんじや〈発心者〉)は『Föxxinju』(ほつしんじふ)の誤り
か。

卷6-5 「西行女子出家事」(異本なし。寛文版本は卷6-3)

訳 くるまにのらんとせしがまたともみまじぞかしとさすがん

慶 車 ニノリシ時 又 見マジキゾカシトサスガニ

寛 くるまにのりし時 又 見ましきそかしとさすかに

訳 こころほそくやおもひけん

慶 心 ボソク 思 ケルニコソ

寛 心 ほそくこそ思 ひけめ

*流布本のみに見える、いわゆる流布本独自話であるから、これによって、所引本文は流布本系統に近いものと考えられるが、本文の語句については、波線部に見るように、現存の流布本と異なる部分もある。これは書写時の誤写や意改などによるものであろうか。なお、所引本文末尾の「さすがん」(「sasugan」)は、「sasugani」から「i」が脱落したものか。

28. Cado cotjiquito nadzuquetariqueru. Döxinja.

(訳文) かど こじきと なづけたりける。どうしんじや。〔影270頁上⑩／訳479頁〕

* 出典名『Dōxinja』（どうしんじゃ）は、「発心者」が「道心者」と同義と考えられていることからの混同か。『邦訳日葡辞書』によれば「発心者」を「⁽²²⁾霊の救われることを願う人、または、現世を厭う人」（267頁右）、「道心者」を「信仰深くて、救霊のことを望んでいる人、または、回心して現世を厭い捨てる人」とする（190頁右）。前掲27に「発心集」を「発心者」と誤っているから、「発心集」を「発心者」と誤り、「発心者」を「道心者」と取り違えたことによるものだろうか。

巻1-3 「平等供奉離山趣与州事」（寛文版本も異本も同じ）

訳 かどこじきと なづけたりける

慶 ^{カト}門 ^{コシキ}乞食 ^{ツケ}トゾ 付 タリケル

寛 門 乞食 とそ つけたりける

山 門 乞食 トソ名付ケ ヽル

神 門 乞食 トソ名付^ヒケ ケル

私 ^フ名^{カト}門^ト乞食

* 「なづけたりける」部分、「な」があるところは異本や『私聚百因縁集』（巻九第十五話）に共通し、「たり」があるところは流布本に一致する。こども流布本・異本両様の性格を有する。

29. Togau nogaren nacadachito xento nari. Idem.

（訳文）とがを のがれん なかだちと せんと なり。同前。〔影270頁上⑱／訳479頁〕* 典拠名は前掲28を承ける。

発心集序

訳 とがをのがれん なかだちと せんとなり

慶 ^{ミツカ}自 ^{アラタ}ラ ^{ナカダチ}改 ムル媒 ト セムトナリ

寛 みつから あらたむるなかつちと せんと也

山 ^ラ自 ^コ科 ^ル遁 ^{ナカダチ}媒 トモセントナリ

神 ^ラ自 科 ヲ遁 ^{ナカダチ}ル媒 トモセントナリ

* 「とがをのがれん」部分は異本に近似し、ここは文意が大きく変わる異同で

ある。長明が説話を収集し、それをどのように用いたかを語るくんだりであり、流布本では、説話を自分（の行い）を改めるたよりにしようとしたとするが、異本では、説話を科を遁れるたよりにしようとしたとし、異本の方がより仏教的色彩の濃い表現で記されているところである。異本は総体として後人が説教を目的として改変を加えた本と見られているから、ここもその一つであろうか。仮にそうだとした場合、そうした表現が、基本的には流布本系統に近いと考えられる所引本文に見られることはどういうことであろうか。流布本のような本文が原態であり、それにこうした仏教色の濃い表現に改変したのが異本の段階であると見るならば、基本的には流布本系統に近いと考えられる所引本文に、異本独自の表現が見られるのは、異本を校合したからだろうか。ただ、そう考えたとしても、所引本文における異本との共通箇所すべてが、異本との校合によって生じたものであるとはいえない。これまで見てきたように、異本と共通する異同の多くは小異であり、誤写・脱落・意改など、書写時に生じたと考えられるものも多く、中には、流布本の誤りと見られるものもあるからである。

一方、ここを異本や所引本文のようなかたちが原態だとすることもできよう。後人がその表現を和らげたとも、あるいは「とがをのがれん」部分が脱落していて、文意が通りにくくなっていたのを、前後の文脈を斟酌して、「改ムル」を補入した可能性もある。

30. Motoua dôxinmo vouaxezarixiga, coreyori goxeno tçume tçuneni xitamai-queruzoto. Dôxinja

(訳文) もとは どうしんも おはせざりしが、これより ごせの つめ つねに したまひけるぞと。どうしんじや〔影270頁下㉓／訳479頁〕

* 「tçume」(つめ) は「tçutome」(つとめ) の「to」が脱落したものか。また、「zoto」(ぞと) は「tozo」(とぞ) の誤り(顛倒)か。なお、典拠名『Dôxinja』(どうしんじや) は、「発心者」が「道心者」と同義であることからの混同・混乱か。前掲28参照。

巻7-6 「賢人右府見白髪事」(寛文版本は巻7-5。異本なし)

訳 もとはどうしんも おはせざりしがこれよりごせのつ^(マ マ)めつねに
慶 モトハ道 心 ナドヲハセザリケルガ是 ヨリ後^コ世^セノ勤^{ツトメ} ナド常 ニ
寛 もとは道 心 なのおはせさりけるかこれより後世のつとめなとつねに

訳 したまひけるぞと

慶 シ給 ケル

寛 し給 ひけるとそ

*流布本独自話であり、所引本文が基本的には流布本系統であったらしいことをうかがわせるものである（ただし、巻次は未詳）。波線部のように、細かい部分で現行の流布本と異なる部分もあるが、概ね一致している。ただし、最後の「ぞと」は寛文版本のような「とぞ」が顛倒したものと見られ、ここは寛文版本に一致する。慶安版本にないのは脱落と見るべきであろうか。新潮日本古典集成や『新版発心集』（角川ソフィア文庫）の校訂本文では慶安版本のままに従っているが、所引本文と突き合わせることによって、慶安版本の脱落との見方もできる箇所である。

31. Naqunaqu namidauo vosayete rixubunuo coso ippen yomi fanberixitozo, co-tayequeru. Idem.

(訳文) なくなく なみだを おさえて りしゆぶんを こそ いつぺん よみはんべりしとぞ、こたへける。同前。〔影270頁下⑩／訳479頁〕

巻7-10「阿闍梨実印大仏供養時減罪事」（寛文版本は巻7-9。異本なし）

訳 なくなくなみだをおさえてりしゆぶんをこそ

慶 泣^{ナク}ハ^ハ涙 ヲ押^{ヲサヘ} テ理^{リシユ}趣^{ブン} ヲコソ

寛 なくなくなみたをおさへて理^{リシユ}趣^{ブン} をこそ

訳 いつぺんよみはんべりしとぞこたへける

慶 一 遍^{ヘン} ヲミ侍 シカトソ答^{コタヘ} ケル

寛 一 へんよみ侍 りしかと ことたへけれ

*流布本独自話であり、ここも所引本文が流布本系統に近いらしいことを示す。

32. Cono tononiua icanaru von naguequino idequite famberunicato tō. Foxxinju.

(訳文) この とのには いかなる おん なげきの いできて はんべるに
か とふ。ほつしんじふ。〔影271頁下⑭／訳481頁〕

卷1-2 「同人伊賀国郡司ニ被仕給事」(寛文版本も異本も同じ)

訳 このとのにはいかなるおんなげきのいできてはんべるにかととふ==
慶 此 殿 ^{コノ トノ}ニハ何 ^{イカ}ナル御 ^{ラン}ナゲキノ出 ^{イテ}来テ侍 ^{ハンヘ}ルニカト問 ^{トフ}ニ
寛 此 殿 にはいかなる御 なげき 出 きて侍 るにかととふに
山 此 殿 ^{コノ トノ}ニハ如何ナル御 歎 ^ノ出 来テ侍 ^{ヘルニカト問フ}==
神 此 殿 ^{コノ トノ}ニハ如何ナル御 歎 ^ノ出 来テ侍 ^{ヘルニ}カト問フ==

*ここは、流布本が「問ニ」「とふに」と、下に文を続けているのに対し、異本が「問フ」と文を終止させているという違いがあるところであるが、所引本文は「とふ」で終わっているため、このあと文が続いていたのか、それとも終止していたのか、どちらにもとれる。

33. Dairiūto natte maximasuto yumeni mitamō. Foxxinju.

(訳文) だいらうと なつて みますと ゆめに みたまふ。ほつしんじふ。
〔影271頁下⑨／訳481頁〕

卷6-3 「堀川院蔵人所衆奉慕主上入海事」(寛文版本は巻6-1。異本なし)

訳 だいらうとなつてま みますと ゆめにみ たまふ
慶 大 ^{リウ}龍 ^ニ成 テヲハシマス由 ^{ヨシ}ヲ夢 ^ニ見ヘタリケレバ
寛 大 ^{リウ}龍 になりておはしますよしを夢 に見 たりければ
私 ^{リテ}成^ニ大日^ニ 御座 ^{マス} 由 ^シ 夢 ^{ユメニ} 見 ケレハ

*ここは流布本独自話であり、所引本文が流布本系統に近いものであったらしいことを示す例である。波線部のように、所引本文独自の異同も見えるが、いずれも小異であり、誤写や意改など書写時に生じた異同であろう。なお、『私聚百因縁集』(巻九第七話)の「御座」は、「みます」「おはします」両様の

読みがあるから、所引本文の「まします」と、流布本の「ヲハシマス」は、「御座」のような漢字表記の読み方の相違から生じた異同である可能性がある。

34. Minagauano quiyoqui nagareni susugitexi Coronono sodeuo mataua quegasaji. Chômei.

(訳文) ^(マ、)みながはの きよき ^(ママ)ながれに すすぎしてし ころのの そでを
または けがさじ。ちやうめい。〔影273頁上⑮／訳484頁〕*前掲9参照。後掲38
にも重出。典拠名「Chômei」については、前掲24参照。

35. Tacaquimo, iyaxiquimo yorocobiqueru.

(訳文) たかきも、いやしきも よろこびける。〔影274頁上③／訳485頁〕*典拠名なし。

巻6-3 「堀川院蔵人所衆奉慕主上入海事」 (寛文版本は巻6-1。異本なし)

訳 たかきもいやしきもよろこびける

慶 ^{タカ}高 ^{イヤシ}キモ ^{ヨロコビ}賤 キモ悦 ケリ

寛 たかきもいやしきもよろこひける

私 ^{タカキモ}高 ^{イヤシキモ}賤 ^{ヨロコビ}喜 ケル

*ここも流布本独自話で所引本文が流布本系統に近いことをうかがわせる。文末の「ける」は、寛文版本や『私聚百因縁集』(巻九第七話)に一致する。慶安版本以外は連体形で終止しており、連体形終止が院政鎌倉期には盛んに行われていたことを踏まえると、これらの方が原態であった可能性がある。慶安版本のかたちは、刊行時に校訂されたものだろうか。

36. Caxicoquimo, vorocanarumo nogarenu narai nari. Idem.

(訳文) かしこきも、おろかなるも のがれぬ ならひ なり。同前。〔影274頁上③／訳485頁〕*典拠名は前掲34を承ける。

巻6-3 「堀川院蔵人所衆奉慕主上入海事」 (寛文版本は巻6-1。異本なし)

訳 かしこきもおろかなるものがれぬならひなり

慶 カシコキモ^{ヲロカ} 愚 ナルモ^{ノカレ} 適 ヌ^{ナラ}習 ヒナレバ

寛 かしこきもをろかなるものかれぬならひなれば

私 賢^{カシコキモ} 愚^{ヲロカナルモ} 不^ス免^{ノカレ} 習^ヒ ナレハ

*ここも流布本独自話で、所引本文が流布本系に近いことを示す例。末尾の「なり」は、流布本や『百因縁集』（巻九第七話）の同話では、「なれば」となっている。

37. Caxirauo voroxi, xoxo xuguiō xiqueruga, nochiua Asucaderano fotorini iuorriu musubi queru. Foxxinju.

(訳文) かしらを おろし しよしよ しゆぎやう しけるが、のちは あすかでの ほとりに いほりを むすび ける。ほつしんじふ。〔影306頁下⑩／訳542頁〕

巻7-8 「道寂上人詣長谷祈道心事」(寛文版本は巻7-7。異本なし)

訳 かしらをおろししよ しよしゆぎやうしけるがのち^ハは

慶 頭^{カシヲ} ヲロシ所々^{シユ} 修行^{キヤウ} シケル 後^{ノチ} ニハ

寛 かしら おろしところノ修行 しけり 後 には

訳 あすかでのほとりにいほりをむすびける

慶 飛鳥寺^{アスカテラ} ノ辺^{ヘン} 二庵^{イホリ} ヲ結^{ムス} ヒ

寛 あすか寺 のほとりにいほりをむすひ

*ここも流布本独自話であり、所引本文が流布本系統に近いことを示す例。異同もあるが、いずれも小異である。

38. Miuagauano quiyoqui nagareni susugui texti, Coromono sodeuo mataua quegasaji.

(訳文) みわがはの きよき ながれに すすぎし てし ころもの そでを または けがさじ。〔影366頁上⑨／訳651頁〕 *前掲9、34に同じ。

おわりにかえて——比較検討の結果と分析——

以上の検討結果から、次のようなことがいえるであろう。

ア、所引本文には、27・33・35・36（以上巻六所収の流布本独自話）や、30・31・37（以上巻七所収話）のように流布本独自話があること、異本独自話がないこと、巻次が流布本の八巻八冊を二巻（または二冊）ずつ一巻（または一冊）にした場合に一致すること、などより見て、所引本文は概ね現存の流布本系統に近いものであったと見てよい。本文の語句も、7・14・24・26などのように、基本的には流布本に一致するものが多数あり、その点でも所引本文は流布本系統に近いものであったと見てよい。

イ、ただし、5、10、15、18、20、28、29のように、ところどころに異本と一致する（または異本に近似する）箇所もある。10、29を除くほとんどが誤写や脱落、あるいは意改等によって生じたと考えられる小異であり、流布本の誤写や脱落、あるいはそれに伴っての意改などである可能性も想定でき、そうであれば、所引本文には、現存の流布本より古いかたちを留める箇所もあるといえることになる。このことは、所引本文にも本文批判にあたって資料的価値があることを意味する。また、このことは同時に、従来いわれているように、異本の本文の中にも、古態を留める箇所があるということであり、流布本と異本に、共通の祖本が想定できることを示すものでもある。

29については、異本独特の仏教的色彩の濃い表現を有する箇所であり、これなどは所引本文と異本のかたちが古態だという可能性と、流布本に異本を校合した箇所であった可能性と二通り考えられる。ただし、29は巻一卷頭の序であるから、所引本文の出典となった本が異本と校合したものであったとしても、それが巻八に至るまで全巻にわたって校合がなされていた本であったかは明らかでない。校合が冒頭のみであったり、途中で終わっていたりする例が、よくあるからである。だから、この一例のみをもって異本と共通する箇所すべてが、異本との校合の結果生じたものであるとは断じられないであろう。

ウ、所引本文には、15や25、27、30、35のように、寛文版本とのみ一致する箇所もある。これらは慶安版本の誤写や脱落、あるいは慶安版本刊行時の校訂によ

るものである可能性もあり、流布本は慶安版本だけでなく、寛文版本や所引本文とも照らし合わせて考える必要があることを示すものといえる。

エ、所引本文には、5、11、28、33、35、36のように、『発心集』からの引用が認められる『私聚百因縁集』と同話関係にある説話もある。この中には、5、28のように、所引本文が異本と『百因縁集』に一致する箇所や、35のように所引本文が寛文版本と『百因縁集』に一致するもある。『百因縁集』が『発心集』から直接引用していることを踏まえると、『百因縁集』の同話本文には、『発心集』の古いかたちが残っている箇所があると推測されるが、所引本文や異本や寛文版本が、そんな『百因縁集』と一致するところがあるということは、これらの中に『発心集』の古態を留める箇所があると考えることができる。このことによっても、本文の校訂に際しては、慶安版本ばかりに頼るのではなく、寛文版本や異本、所引本文なども参照する必要のあることがいえる。

オ、また、18のように、中には、所引本文によって、従来の誤りが是正できると見られる箇所もある。

カ、所引本文独自の異同（現存のいずれの本とも一致しない異同）もある。その中には明らかな誤り、文意の通らない箇所もあるが、多くは小異であり、転写の間に生じた誤写・脱落、あるいはそれに伴って生じた意改と考えるのが自然である。これらは所引本文が流布本系統に近いものではあるものの、現存の流布本二本（慶安版本・寛文版本）とは、やや距離のあるところも存することを示す。これは、流布本には、現存の流布本以外にも、部分的にはあるが、さまざまなかたちをもつ本文が存在したこと、言い換えれば現存の流布本のかたちは、そのうちのひとつのかたちに過ぎないことを示しているであろう。

以上のように、所引本文は、基本的には流布本に一致し、流布本系統に近いと考えられるが、異本とのみ一致する箇所も多数あり、また従来あまり顧みられなかった寛文版本とのみ一致する箇所もあって、所引本文は、従来の流布本（慶安版本＝校訂本文の底本）を相対化するものだといえる。

そして、こうした特徴は、そのまま『私聚百因縁集』所引の『発心集』本文や、兼築氏蔵古写断簡の本文の傾向とも一致する。このことは、中世に流布していた

『発心集』本文が、(本文の語句のレベルにおいては) 流布本と異本双方の性格を持つものであったらしいことをうかがわせ、従来いわれているように、流布本と異本とが、共通の祖本から出たものとの想定を補強するものであるとあってよい。また、所引本文中には、『私聚百因縁集』との同話もあり、これと比較すると、慶安版本と一致せず、寛文版本や異本、『百因縁集』と一致する箇所もあった。こうした箇所というのは、中世の『発心集』をうかがわせるものといってよい。

これまで、『発心集』の本文批判(本文校訂)は、一部を除いて、ほとんど流布本の慶安版本と異本である神宮文庫本の二本で行われてきた。もちろん、それは山鹿文庫本が公開されていなかったなどのやむを得ぬ事情があったところもあるが、山鹿本が公開された現在、こうした結果を踏まえると、やはり本文批判というものは、現存伝本すべてを比較検討の俎上にあげる必要がある。そのためにも、現存伝本の異同が一目瞭然となるような対照本文形式の校本というのが期待されるであろう。

ともあれ、所引本文は、巻次の問題のみならず、本文批判、本文校訂の問題においても、また諸本の成立の問題においても、検討するに足る有益な資料であって、ここから中世の『発心集』の伝本の姿をうかがうこともできる、ということである。

注

- (1) 『古今著聞集』や『撰集抄』と同じように、連濁が起こったものであろう。このことは、後述する『大文典』所引本文に関する先行研究のうち、永積安明氏も述べておられる(後掲注4参照)。なお、『日本国語大辞典』第二版は、「ほっしんしゅう」で立項しているが、そう読む典拠は示していない。
- (2) 新典社、2016年6月。
- (3) 古写断簡の紹介は以下のとおり。このうち、古写断簡と『発心集』諸本との詳細な検討を行っているのは①の兼築氏である。
 - ①兼築信行氏蔵の断簡〔巻三第四話の一部〕(同氏「『発心集』の古写断簡をめぐって」、『中世文学』第46号、中世文学会、2001年6月)。
 - ②個人蔵の断簡〔巻六第十二話の一部〕(国文学研究資料館創立四十周年特別

展示『鴨長明とその時代 方丈記八〇〇年記念』2012年5月、39頁、新聞水緒氏解説)。

- ③京都国立博物館所蔵断簡〔卷二第一話の一部〕、寛喜四年(一二三二)修復、金剛峯寺寂靜院地藏菩薩像胎内納入願文紙背(京都国立博物館特別展観「国宝十二天像と密教法会の世界」(会期 二〇一三年一月八日～二月十一日)における特別展示「成立八〇〇年記念 方丈記」に出陳。翻刻紹介等はなし)。
- (4) このことを最初に指摘されたのは、はじめて異本(神宮文庫本)を紹介された永積安明氏の「異本『長明発心集』について」(『中世文学論——鎌倉時代篇——』日本評論社、1944年11月第一刷、1946年10月第二刷)。その後、築瀬一雄氏「発心集研究序説」(同『鴨長明の新研究』中文館書店、1938年4月)、廣田哲通氏「『発心集』本文をめぐる諸問題」(『説話文学研究』第14号、説話文学会、1979年6月。のちに同氏『中世仏教説話の研究』勉誠社、1987年5月に収録)などがある。
- (5) 注4に同じ。
- (6) この説の代表は、注4の永積氏と築瀬氏の論考、浅見和彦氏「発心集の原態と増補」(『中世文学』第22号、中世文学会、1977年10月。のちに同氏『説話と伝承の中世圏』若草書房、1997年4月に収録)などである。また、千本英史氏「偽書と説話——鴨長明の場合」(『国文学——解釈と教材の研究——』第46巻第10号、2001年8月)もこれを支持しておられる。
- (7) 貴志正造氏「ひじりと説話文学——『発心集』の世界——」(『日本の説話3 中世I』東京美術、1973年11月)、同「発心集総説」(角川鑑賞日本古典文学『中世説話集』角川書店、1977年5月)、同「『発心集』から『方丈記』へ」(『国語と国文学』第五十五巻第三号、東京大学国語国文学会編、1978年3月)、原田行造氏「発心集の構想から眺めた成立過程試論——序・跋と八巻の形態めぐって——」(同『中世説話文学の研究 上』桜楓社、1982年10月)、伊東玉美氏「流布本『発心集』跋文考」(『国語と国文学』第九十巻第八号、東京大学国語国文学会編、2013年8月)など。なお、新聞水緒氏「流布本『発心集』成立試論(一)(二)」(同『神仏説話と説話集』清文堂出版、2008年3月)も概ねこの考え方に立つが、巻八第十話(通算第九十八話)以降は後人の増補と見ておられる。
- (8) 前者は貴志正造氏(前掲注7参照)、後者は山部和喜氏「神宮文庫本『発心集』の構成」(『国語と国文学』第69巻9号、東京大学国語国文学会、1992年9月。のち

- に『発心集新考』おうふう、2012年6月所収）である。
- (9) 注4の永積氏論文、及び永積氏「長明発心集考」（注4の永積の著書、174～177頁）。
 - (10) 築瀬一雄氏『発心集』角川文庫、1975年4月、530～531頁。
 - (11) 永積氏「長明発心集考」（注4の永積の著書、177～181頁）。
 - (12) 注4の築瀬氏の論考、274～281頁。
 - (13) 注4の築瀬氏の論考、243～298頁。
 - (14) 「ロドリゲス『日本大文典』における鴨長明作品の引用について——『発心集』・『方丈記』——」、「古典遺産」第61号、古典遺産の会、2012年3月。
 - (15) 前掲注3の①の論文、第三、四、六の各節。
 - (16) 原文は日本思想大系『源信』石田瑞麿校注、岩波書店、1970年9月、369頁下段（原文）、180頁（該本の読み下しは「野鹿は繋ぎ難く、家狗は自ら馴る」）。『往生要集』が典拠と見られることは、ほとんどの『発心集』の注釈書が指摘するところである。なお、この『往生要集』の文の出典は『涅槃経』梵行品といわれる。
 - (17) 『新修京都叢書』第二十三巻別冊「古地図集」1、同叢書刊行会編、臨川書店、1976年6月。
 - (18) 新潮日本古典集成『方丈記・発心集』三木紀人校注、新潮社、1976年10月、43頁。角川ソフィア文庫『新版発心集』浅見和彦・伊東玉美校注・訳、KADOKAWA、2014年3月、13頁。
 - (19) 鎌田正・米山寅太郎編、大修館書店、2000年4月、868頁。
 - (20) 『異体字研究資料集成』第九巻、杉本つとむ編、雄山閣出版、1975年4月、216頁。
 - (21) 『校註鴨長明全集』築瀬一雄著、風間書房、1956年10月補訂版（初版は富山房、1940年9月刊）巻末に翻刻あり（通し頁はなし）。
 - (22) 土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店、1980年5月。